

マーシャル諸島での行動で、ヒキ二被ばく船員訴訟原告団長の下本節子さんは、いろいろな場面で、日本の約1000隻の漁船と漁師たちが米国を核実験で被災したことを語りました。

漁船被災驚き

ちょうど同じ時期に首都マジュロにいた国連人権理事会のオブザーバーは、「そんなに多くの漁船と漁師たちが、全く知らなかったと驚きを隠せませんでした。」

下本さんを取材した現地の新聞「マーシャル・アイランド・ジャーナル」のギフ・ジョンソンさんもこの事実について、下本さんはアラバマ州の実験がもたらした影響の広さと深刻さを目を開かせ、闇に葬られた巨額の犯罪を告発しました。

ビキニ被災

70年

原水協マーシャル訪問記



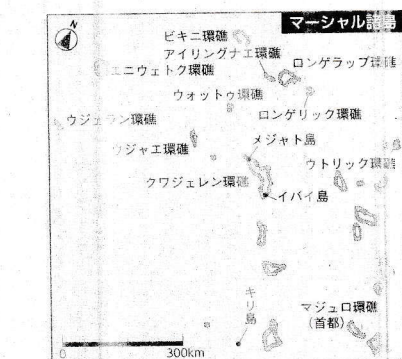
2月29日、下本さんは、ロンゲラップの被ばく者と懇談しました。1人は、実験の時、ヒキ二とロンゲラップの近くのアイリングナエにいたギヤシーさん。「実験後、米艦船やヘリコプターがやってきて初めて、起こったことに驚き怖かったです。クワンシに連れていかれて、毎日海に入り、放射能を洗い流せと言われた。私は6回流産し、甲狀腺の薬も飲んで

核被害に終わらない



懇談する下本さん(左)とロンゲラップの被ばく者=2月29日

いる。私の娘も、脳に障害のある子を産んだ。実験は私たちの人生をめちゃくちゃにした。アメリカは最も責任を取るべきだと語気を強めました。もう1人はミナナさん。「お母さんが、頭蓋骨の手術をしたのを産んだのを覚えてる。島民や子どもたちの健康への影響や将来を考えて、1985年シヤットに避難したのには理解するが、メソヤットにも、マジュロにも、ロンゲラップにない。私の居場所も、ロンゲラップしかない。望みの急を語りました。



2人の悲惨な体験を聞き、下本さんは「怒りがこみあげてきた」と話しました。3月1日の夜、フラポ実験当時、放射能を含まない「死の区」が雪のように降り注いだロンゲラップ環境自治体主催の集まりがあり、代表団が参加しました。

状況の聞き取りを行いました。米国の被害者と認定しているウトリック環礁のヒロシ・ヤマムラ上院議員が「現在、島民の7割が甲狀腺やがんの問題を抱えています。水頭症の子どもや耳のない子どもも生まれました」と放射線の被害を訴えました。ウトリックの島民は実験後、数回移住を繰り返さなければならなかったと述べた。

議員らと懇談
代表団は、被害地環礁の上院議員や首長と懇談し、被害者たちの深刻な状況を聞き取りを行いました。米国の被害者と認定しているウトリック環礁のヒロシ・ヤマムラ上院議員が「現在、島民の7割が甲狀腺やがんの問題を抱えています。水頭症の子どもや耳のない子どもも生まれました」と放射線の被害を訴えました。ウトリックの島民は実験後、数回移住を繰り返さなければならなかったと述べた。

原水協禁止日本協議会はヒキニ被災70年のことし3月25日から3月10日までの日程でマーシャル諸島共和国に代表団を派遣し、ヒキニ被ばく船員訴訟原告団長の下本節子さんから高知代表団とともに、現地で核被害追悼デー記念式典に参加しました。また、被害の実態調査、被害者への健康相談、核兵器禁止条約のロビー活動など、活発な行動を展開しました。日本原水協の土田生事務局長長のレポートです。

代表団が行進

1954年のヒキニ被災から70年の3月1日、マーシャル諸島の首都マジュロでは、核被害追悼デー記念式典が開かれました。

代表団が行進

式典の前に、アレシ博物館から会場となったマジュロ短期大学に向いて、市民や子どもたちがプラカードを掲げ行進しました。原水協代表団も高知代表団も元気よく行

ビキニ被災

70年

原水協マーシャル訪問記



式典では、被害地環礁を代表して、ヒキニ環礁のジェス・ガスパール上院

米国は責任果たせ



式典会場まで行進する日本の代表団たち=1日



3・1ビキニ式典の会場で大統領(左)にあいさつする土田さん(右)と下本さん(右)=1日

もヒキニに帰れず島民が苦難の生活を強いられている状況を訴え、「忘れてはならない」と声を上げました。

式典のハイライトはヒルダ・ハインズ大統領の発言でした。

2005年11月の選挙を経て政権が決定したばかりです。マーシャル諸島は岐路に立っています。

「お母さんが、頭蓋骨の手術をしたのを産んだのを覚えてる。島民や子どもたちの健康への影響や将来を考えて、1985年シヤットに避難したのには理解するが、メソヤットにも、マジュロにも、ロンゲラップにない。私の居場所も、ロンゲラップしかない。望みの急を語りました。」

自由連合協定、マーシャル諸島が1986年に独立する際に、米国の財政支援と安全保障をマーシャル諸島に提供するもので、代わりに太

め、第五福竜丸の大白又七さんと、この式典に参加してきた私としては、今回の式典に「これも時代の流れなのか」と物足りなさを感じました。

と関係たちが並びます。下本さんは、父親の被ばくがなに侵された苦難、約1000隻の漁船とその漁師たちが被災していること、調査も補償もなく置かれてきたことを語り、「被害を与えた国は責任を取り、被害者を救済するべきです。黙っていても、なかつたこととして、さげすまれます。」「指

たもの」の出荷は禁止され、70年間の経済損失は大きい。青年や子どもたちは、故郷の記憶も思いもな、アイデンティティが失われている」と述べた。

3・1ビキニ式典の会場で大統領(左)にあいさつする土田さん(右)と下本さん(右)=1日

しかし、式典の後大統領主催の宴会で下本さんは発言する機会を得ました。目の前には、米国の臨時代理大使、大統領

「お母さんが、頭蓋骨の手術をしたのを産んだのを覚えてる。島民や子どもたちの健康への影響や将来を考えて、1985年シヤットに避難したのには理解するが、メソヤットにも、マジュロにも、ロンゲラップにない。私の居場所も、ロンゲラップしかない。望みの急を語りました。」

日本原水協 土田生事務局長